第７１７号　ヤスクニ通信 ２０１４年１０月１２日

日本キリスト教会靖国神社問題特別委員会

<祈りのために>

　それから、ヨセフは父ヤコブを連れて来て、ファラオの前に立たせた。ヤコブはファラオに祝福の言葉を述べた。　　　　　　　　　　　創世記47章7節

　アブラハム、イサク、ヤコブと続くイスラエル族長物語の終局部分。ヤコブは晩年を迎えています。その息子、正妻ラケルの長男ヨセフは父ヤコブの寵愛を受けて育つのですが、兄弟たちのねたみに会い、エジプトに売り飛ばされてしまいます。しかし、そこで彼は頭角を現し、ファラオにつぐナンバー２の位置にまで昇りつめました。当時、世界は大飢饉。人々は食糧を求めてエジプトへ、エジプトへとやってくるのです。カナンの地に残っていた当のヤコブと親族たちもヨセフを頼ってエジプトへ下ってきます。そのエジプトで権力の最高峰に立つファラオとの謁見の場面が冒頭の聖句です。

　ところが、「ヤコブはファラオを祝福した」（7節、岩波版・月本訳）、また別れに際しても、「ヤコブは祝福して、ファラオの前から退出した」（10節、同上）とあるではありませんか。いったい、祝福は、豊かな富と権力の持ち主が、貧しい民衆に向かって差し出す行為ではないのか。なのに、物乞いしなければならない一介の牧羊者ヤコブが祝福の与え手になっているとは！　わたしたちはここに鋭い権力批判の契機をみいだすことができるでしょう。ファラオの所有する文明の富を背景にした権力構造の実態を、内側からそして下から問いかける物語のひとこまをみいだすことができるでしょう。

　いま、わたしたちの社会は富（経済力）を後ろ盾にした強権政治が大手を振っているように思えてなりません。まるで自分が権力の頂点に立っているかのように、「国民の生命と財産を守り、全国津々浦々にまで景気を浸透させる」と豪語しながら、しかし、最末端の現実にはつゆほどの想像力もおよばず、しかも、それを宗教（ヤスクニ状況！）の名において正当化しようとする政治の貧困。わたしたちはもう一度、ファラオの前で、低みに立ちながら、一歩も退くことのなかったヤコブの気概の根源がどこから来たのかに思いをはせなければなりません。神の被造物としての人間が環境世界を含め人間らしく生きていく持続可能な世界はどこから、どなたの祝福をもって完結するのかに思いをはせなければならないでしょう。

<祈り>

　主よ、あなたの祝福によって、この過ぎ行く世界を支えてください。またわたしたちをその祝福の取りつぎ手として用いてください。

　　　　　（渡辺輝夫　夕張伝道所牧師　北海道中会ヤスクニ・社会問題委員）

**「靖国神社問題とわたし」**

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　五十嵐喜和（茅ケ崎東教会牧師）

　日本キリスト教会が、「靖国神社問題」に恒常的に取組むことになったのは、1969年7月3日神学校問題に関する臨時大会で「靖国神社法案」反対の抗議声明を表明した後、同年10月第19回定期大会で特別委員会を設置してからでした。しかし、その頃のわたし自身は、事情がよく呑み込めませんでした。一宗教団体の国家護持運動に反対する宗教間の争いや、国会で議論する政治問題に教会が関わることになるという程度にしか、考えていなかったのです。これが全くの無知によることであると知ったのは、福岡城南教会の藤田治芽牧師によってでした。同教会史編纂作業が始まったとき(1969)、戦時下を担当するわたしに、藤田治芽牧師は便箋６枚のメモ書きを下さいました。その中に、礼拝時「宮城遥拝」を行ったことの責任の重さが綴られていました。そして「靖国神社問題の戦いを教会的告白的なものしなければならないとの決意もこのことの反省からである」とあったのです。

　以来、講演や文献を通し、靖国神社創建の由来、そこに死者が祀られること、その神社を参拝すること等について知った時、単なる政治問題や宗教間争いの問題ではなく、国家が、靖国神社参拝を要求し、宗教・宗教団体を統制し、思想・信教の自由を侵害し、国家のために犠牲になることをすら求める神社が別格官幣社としての靖国神社であることを知ったのです。この靖国神社国家護持運動は、今後の戦死者を前提とし国民の靖国神社参拝強要に道を開くことになりかねないと理解しました。このことについては、ローマ帝国時代、皇帝を主と拝むことに対抗して、初代キリスト者が「イエスは主である」との信仰に立ったこと、そのことがこれから重要となると理解したのです。

　それは熊本の開拓伝道に遣わされた時代でした。大会の靖国神社問題特別委員会の「靖国神社問題ニュース」によって、熊本の諸教会に呼びかけ、東・西本願寺関係の住職方と牧師たちとで勉強会をもち、招かれて大分県宇佐市在住の住職方の集まりにも出掛け、また、町内会費を神社・祭りの費用に計上しない方向で話し合ったこと等がありました。反対運動にも多様な理解があることを知ったのもこの頃です。そして岐阜教会の長老であった長縄由雄さんから、戦時下同じく長老であった祖父が、熱烈に必勝祈願をしたことを知らされました。このような中、藤田治芽牧師の講演録によって、靖国神社問題にさらに目が開かれたのです。

　その講演では、靖国神社問題の取り組みは長期の努力を要し、教会の態勢を整える必要があり、そこでは第１に、キリスト告白に基づいた教会闘争を展開する必要が語られていました。そして反対運動は、信仰の告白をとおして改革主義教会の神学に基づいてなされ、同時に旧日本基督教会がキリスト告白の線に立ってきたことを受け継いでいることも、具体例によって示されていました。第２に、靖国神社問題への取組みは、教会の独立に深く関わり、その独立はミッションからのみでなく、国家権力からの独立の主張でもあって、それはキリスト告白から来ていることを忘れてはならないとも言われました。そして最後に、「同時にそれと共に私達は伝道の姿勢をどこまでも強化していく必要があるのだと思うのであります。主イエス・キリストがすべてを支配したもう主の主、王の王であるということが、私達の告白であると同時に、その事をいまだ知らざる人々に伝える事が私達の伝道である」として、「靖国問題は日本の教会の＜否＞の戦いであり、伝道のことは＜然り＞の戦いである」と述べられました（『50年史』344～345頁）。

　改めてこの主張に耳を傾け、自己を吟味し、靖国神社問題の焦点を鈍らせることなく、国家権力が何をしようとしているかを注視し、主イエス・キリストによって立つ教会の独立・自由の課題として担い直すことが求められていると考える昨今です。「日本の国家体制は、国民の平和生存権を奪う暴力装置（無法の権力）へと退化しつつあり、そこでは貧富の差が極大化し、自然生態系が破壊され、そして戦争が近づいている」（福嶋揚。2014年教会全体

修養会講演）と言われます。グローバルな課題でもあることを改めて学んでいます。

　「イエスは主である」。これが原点です。イエス・キリストのものとされているわたしたちは、「キリストに与ることによって我々は特に二重の恵みをうける。すなわち、彼の罪なきことによって神と和解したからには、天にはもはや審判者はなく、代わって憐れみ深い父を持つこと、次にキリストの御霊によって聖化され、罪なく純潔なる生に思いを巡らすようになることである」(カルヴァン著渡辺信夫訳『キリスト教講要改訂版』Ⅲ-11-1）。この聖化の歩みの中に、偶像礼拝からの喜びと感謝を伴った解放・自由があります。聖化は恵みなのです。

**憲法前文の文体と主権在民について**

―「書のスタイル文のスタイル」石川九楊著（筑摩書房）を読む―

尾谷則昭（南浦和教会長老）

著者は書家であるので、「書のスタイル」についての解説には異存ない。しかし「文のスタイル」にまで内容が及ぶとなると、正直、少し越権行為ではないのかと訝る気持ちもあったが、その彼が論を進めて「日本語の文体が尤も進化を遂げた例」として日本国憲法前文を引き、「この憲法の凄味は、次の箇所にある。『政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないようにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。』というところにある。ここには『政府が戦争の惨禍を引き起こした』『また再び戦争を起こしかねない』という驚くべき記述がある。政府は過ちを犯す。その誤りを克服するため、私たち国民にこそ主権があるのだという文体は、東南アジアの文体にはないものである。そしてこの文体こそが西欧語の文体の根底に横たわっている核心部である。」（p263,264）と断定していることは圧巻であり、慧眼を開かされた。

そのわけを、彼は「儒教は、民を治める指導者としてのあり方を説いた治者の思想である。それゆえ当然、治者以外の民衆に関しては一切言及されていない。つまり東アジアの漢詩・漢文の世界には、フランス革命以降の西欧が生んだ民衆の側からする思想が決定的に欠如している」と明快に説明する。さらに「儒教の聖典である『論語』は、なるほど現在もなお生きている、含蓄に富む思想であるが、エリート知識人が噛みしめ、自らを律すべき倫理や道徳であって、国家や政治に翻弄される民衆が押し付けられるべきものではない。民衆にとっては臣民の心構えにすぎず、自らを主人公へと変える民主主義の思想ではない」（p242）と論破する。つまり、日本国憲法における主権在民、民主主義の主人公である民衆（貴方であり、私であり、我々である）は過ちを犯しうる政府を常に監視し、主権をシッカリ行使すべきであるにもかかわらず、あたかも、大日本帝国憲法下の「臣民」宜しく、為政者の仁徳を期待する風潮から抜け出せないでいる。このような日本国民の現状に対し、著者は危機感をもって、主権在民への覚醒を呼び掛けている。

ここで取り上げられている「儒教の思想」は、日本人には馴染の思想であるが、彼が主張するように“民衆”の思想と混同されている懸念が大いにある。また、「上に立つ権威に従うべきです。」（ロマ書3：1）という聖書の言葉が、併せて「主権在民」という考え方を曖昧にし、背後に押しやることに加担していないかが危惧されるし、更には、福音が福音として、変革の力を秘めた御言葉として語られてきたのかについても、峻厳に吟味されなければならないと言える。

「敗戦後の日本国憲法前文によって、はじめて日本語が獲得した西欧の文体、スタイルである民主制、民主主義－このスタイルが解体の危機にある。それが近年の日本の政治状況や改憲への動きである。なぜ解体の危機にあるか。それは、この民主制、民主主義の理念を誤解し、その獲得と不断の維持を怠ったからである。民主制とは、人民、国民が主人公たる政治制度である。ここでは国民が国民のために、国民の下位に国家を形成する。」（p273,274）著者の渾身の訴えである。

**＜ヤスクニ・ニュース＞**

**応援してください**知人からのメール

元朝日新聞記者の植村隆さんは、1991年に朝鮮人従軍慰安婦の記事を書いたことで、右派メディアなどからの誹謗中傷、ネット右翼などから様々な攻撃を受けています。彼が非常勤講師をしている北星学園大学にまで、「植村をやめさせなければ爆弾を仕掛ける」というメールや「自殺に追い込む」と家族の写真をネットにさらしたり、抗議の電話が相次いでいます。800通近い中で、植村さんと大学への応援メールはわずか10通です。心ある大学の方たちは、植村さんの人権と正当性を守り、大学の自治・自主性、学問・教育の自由・自主性を守るため、右傾化に伴う「おかしな空気」、「得体の知れない恐怖」を伴った圧力に抗して頑張っておられます。北星学園（ミッションスクール）は戦後50年に「戦争で、アジアの人々に与えた多くの被害・苦しみを痛感し、その責めに答えることが同時代に生きる者の責任」の平和宣言を発表しています。その精神が今問われております。もし大学が植村さんの雇用を継続しなくなれば、一人植村さんの問題ではなく、報道、ジャーナリズムへの攻撃です。大学への応援・激励メールを、大学HPのアドレスに書き込んでいただきたいのです。賛同していただけるなら、ご協力をお願いいたします。（北星学園は宣教教師古賀清敬が勤務している大学）<https://www.hokusei.ac.jp/tagblocks_form/input.php?form_no=0000000003>

**歴史認識見直しで孤立も…安倍首相の姿勢批判**…

英国国際戦略研究所（IISS）は18日、2014年版「戦略概観」を発表した。この中で日本の安倍政権について詳しく論評し、安倍晋三首相の歴史認識に関する姿勢は日本を国際的孤立に陥らせかねないと警告した。概観は「過去の植民地時代の歴史認識を見直すことによって、国際関係を前進出来るとの安倍氏の政治的信条は、日本を後退させた。これが中国や韓国だけでなく、同盟国の米国との関係も阻害した」と批判。13年末に安倍氏が靖国神社を参拝したことで、「中国による（東シナ海上空の）防空識別圏設定問題を廻る日本への国際社会の同情が吹き飛んだ」と指摘した。安倍氏の政治的地位は比較的安定しているように見えるものの、「集団的自衛権の行使を推し進める姿勢は、政権に潜在的なダメージを与える」と警告している。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　(ロンドン時事9月18日)

**靖国参拝訴訟始まる 首相側争う姿勢**

安倍総理大臣が去年12月に行った靖国神社参拝に、全国の宗教関係者や市民など273人が、政教分離を定めた憲法に違反する行為で精神的苦痛を受けたと主張して、参拝の差し止めや損害賠償を求めた。22日、東京地方裁判所で裁判が始まり、原告で広島県出身の被爆者、関千枝子さん（82）は「集団的自衛権の行使容認等、総理大臣がやろうとしていることは、平和に暮らす権利を保障した憲法に違反するもので、その凝縮が今回の靖国神社参拝です。戦後の民主主義を大切にしてきた私の心は切り裂かれている」と訴えた。（NHK 9月22日）

**日本キリスト教会 日本軍「慰安婦」問題と取り組む会**

**2014年 講演会ご案内**

|  |
| --- |
| 717号ヤスクニ通信2014年10月12日発行 日本キリスト教会靖国神社問題特別委員会 発行人　栗田英昭　編集 川越弘印刷発行 篠塚予奈（東京告白教会）〒157-0061東京都世田谷区北烏山1-51-12 TEL＆FAX03-3300-6529 |

11月３日（月・休）午後１時30分

日本キリスト教会　柏木教会

講師　班 忠義（映画監督）

テーマ「日本軍『慰安婦』と性暴力被害」

…朝鮮半島と中国人被害女性の過去と現在…

※ DVD映像を交えてお話しいただきます